

MIS3 後半期の環境史と後期旧石器時代前半期の遺跡群の年代 Radiocarbon dates of the Early Upper Palaeolithic and Environmental History during the MIS 3 in the Palaeo-Honshu Island

工藤 雄一郎^{1*}

KUDO, Yuichiro^{1*}

¹ 国立歴史民俗博物館

¹National Museum of Japanese History

日本列島に現生人類が居住し始めてから、それ以降の先史時代の人類活動の変遷史を、第四紀学的視点から「人類と環境との相互関係の変遷史」として理解するためには、そのための基礎となる時間的枠組みを整備することが必要である。筆者は氷床コアや石筍の酸素同位体変動などを基準として、MIS 3 から MIS2 の環境史 (約 60,000 ~ 11,500 cal BP) を以下の 7 段階に分けて整理した。

- ・ MIS 3 Stable Warm (約 60,000 ~ 44,000 cal BP)
- ・ MIS 3 Transition (約 44,000 ~ 38,000 cal BP)
- ・ MIS 3 Early Cold (約 38,000 ~ 28,000 cal BP)
- ・ MIS 2 LGM Cold-1 (約 28,000 ~ 24,000 cal BP)
- ・ MIS 2 LGM Cold-2 (約 24,000 ~ 15,000 cal BP)
- ・ MIS 2 LG Warm (約 15,000 ~ 13,000 cal BP)
- ・ MIS 2 LG Cold (約 13,000 ~ 11,500 cal BP)

また、後期旧石器時代前半期の考古遺跡の ¹⁴C 年代測定例を集成して較正年代に変換することで、これらの各時期と考古編年との対応関係を明らかにした。

・ MIS 3 の Stable Warm ~ Transition (約 60,000 ~ 38,000 cal BP)

MIS3 の前半であり、野尻湖でナウマンゾウなどの大型哺乳類化石が多く見つかった時期である。MIS 3 は最終氷期のなかでも亜間氷期にあたり、特にその前半は相対的に温暖な環境下にあった。しかし、日本列島の後期旧石器時代初頭の遺跡群は 38,000 cal BP を遡ることはないようであり、後期旧石器時代以前に人類が古本州島に居たのかどうか、この点をまず解明することが必要である。野尻湖の動物化石群については、キルサイトと考える見方もあるが、4 万年前以前に人類がいたかどうかは確実ではない。野尻湖立ヶ鼻遺跡の動物化石群を“人為”と考える場合、現在主流となっている現生人類の拡散モデルを前提とするならば、現生人類が到達する以前に日本列島に別の人類が存在していたことを証明しなくてはならない。

・ MIS 3 の Early Cold (約 38,000 ~ 29,000 cal BP)

日本列島の後期旧石器時代前半期に相当する、立川ローム X 層段階から VI 層段階の遺跡の年代測定例は、長野県貫ノ木遺跡と熊本県石の本遺跡の例を除いて 33,000 ¹⁴C BP まで遡るものはほとんどなく、およそ 32,000 ~ 25,000 ¹⁴C BP の範囲のものが多い。これらを IntCal09 で較正すると、37,000 ~ 30,000 cal BP 頃となる。したがって、後期旧石器時代前半期の遺跡群は、MIS 3 の Early Cold (約 38,000 ~ 29,000 cal BP) 以降の時期に位置づけられる。

この時期は、MIS 3 前半の温暖期がすでに終了し、最終氷期最寒冷期に向かい気候の寒冷化が顕著になってきた時期であったが、37,000 ~ 34,000 cal BP の時期に九州から本州島北部まで旧石器時代遺跡の急激な増加がみられる。これらの遺跡群は斧形石器、台形石器、石刃石器、環状ブロック群などを特徴とし、日本列島における人類の活動痕跡が明確化する時期である。この遺跡数の増加は、現生人類の日本列島への拡散と関連している可能性が高いことを、多くの研究者が指摘している。

したがって、「日本列島において後期旧石器時代の遺跡が発見され始める時期は約 38,000 cal BP よりも新しい時期であり、その中心的な年代は約 37,000 cal BP 以降である」と考えておきたい。また、これらの後期旧石器時代の最古段階の石器群が遅くとも約 36,000 cal BP 頃までには古本州島に広く分布することから、日本列島への現生人類の移動ルートは不明ながら、古本州島に到達した現生人類は、いち早く古本州島内に拡散したと考えることができるだろう。

武蔵野台地 VII 層段階から VI 層段階の石器群は、33,000 ~ 29,000 cal BP を中心とした年代域に位置づけられるようであり、Early Cold のなかでも後半に相当する。およそ 37,000 ~ 32,000 cal BP を中心とする X 層 ~ IX 層段階は、Early Cold のなかではやや暖かさが残る時期であったが、約 32,000 ~ 29,000 cal BP を中心とす VII 層 ~ VI 層段階においては、最寒冷期とほぼ同程度まで寒冷化が進行しつつあったことが、各地の花分析結果などから推測される。なお、AT 火山灰の降灰は 30,000 ~ 29,000 cal BP 前後に位置づけられると推定されることから、この Early Cold の最末期ごろに位置づけられることも分かった。